

少子高齢化の進む箱根町における、農業活動を取り入れた温泉地活性化プロジェクト

A hot spring revitalization project incorporating agricultural activities in Hakone, where the population is declining and aging.

○池田拓未¹ , 江川香奈²

○Takumi Ikeda¹ , Kana Egawa²

In Hakone, depopulation and aging are progressing, reducing all age groups. To address this welfare challenge, a new healing facility integrates hot spring therapy and agriculture, offering comfort without pressure and encouraging outdoor activity through farming. This “urban power outlet” supports health, intergenerational exchange, and mutual care. Operated by Totonoe Farm, it connects locals, tourists, and industries, collaborating with nearby farmers for crop exchanges, improving food self-sufficiency. Partnerships with the Hayakawa River management ensure water use, while links with the tourism association create event venues. Children gain environmental education, elders engage in farming-based rehabilitation, and silver workers find meaningful jobs. Visitors experience farming and crafts, supported by interpreters for international guests. Totonoe Farm thus becomes a hub of healing, farming, and learning, fostering Hakone’s sustainable future.

1. 提案背景

箱根町では現在、少子高齢化が進み、平成23年と平成28年の直近5年間の人口による将来人口の推計では、総人口は、平成28年に11,969人であったものが、令和3年で11,000人、令和8年で10,000人とまちに住む人口を推計している。この推計による0~14歳の年少人口比率は8.0%から6.8%、15~64歳の生産年齢人口比率は56.2%から52.3%まで減少し、65歳以上の老年人口比率は35.8%から40.9%まで高まると推測される。総人口の減少につれて年少人口、生産年齢人口、老年人口とも減少していくことが予想される¹⁾ (Fig.1)。

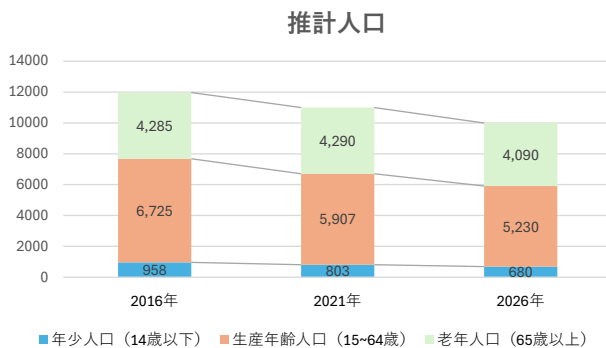


Figure.1 Graph of Estimated Population in Hakone Town¹⁾

2. コンセプト

2.1 湯治と農業の相乗効果

箱根町において、少子高齢化という福祉的課題に正面から向き合い、「湯治」と「農業」を融合させた療養

型施設の実現を目指す。気負わずに過ごせる居心地の良さといった温泉の魅力と、野菜を育てるために外へ踏み出し、気持ちの開放と行動のきっかけを与える農園の魅力の2つの空間を組み合わせ、地域包括ケアの仕組みを整備することで、高齢者の健康維持、多世代交流、地域内での支え合いを促進する、現代の湯治施設のあり方を提案する。そしてこの施設は、段階的に交流する湯治施設を目指す。まずはコミュニティに参加せずに交流し、徐々に街ぐるみで交流をするようになり、その後は観光客との出会いも創出する。気軽に立ち寄り、体調や健康増進を温泉で整え、農園で人と交流して活力を得る、いわば、「街の中のコンセプト」をコンセプトに地域活性化を試みる。

2.2 湯治と農業の連携によるつながり

本計画の運営母体として、Fig.2とFig.3のように温泉と農園の利用の案内・管理を行う、「ととのえファーム」が設立される。ととのえファームは、町全体を巻き込む地域共創型のプラットフォームとして機能し、多様な立場の人々と連携することで、持続可能で開かれた湯治・農業空間を実現する。例えば、計画敷地の冷涼な気候を考慮し、温暖な気候の箱根西麓三島の農家と協力し、それぞれの環境に適した野菜を栽培し合うことで、農作物の交換会を行い、第一次産業の割合が1割に留まる、この町における食の自給力を高める。また、農業用水の安定供給に向けては、早川流域治水協会と連携し、取水の許可申請・許諾を得ていく。加えて、ととのえファームは箱根町観光協会と協力し、

1: 日大理工・学部・海建 2: 日大理工・教員・海建

地元の祭りやイベントの開催場としても活用され、町の賑わいの拠点となる。更に、子供たちには農業を通じた自然環境教育を提供し、子育て世代に対しては農園での実習を通じて質の高い学びの場や放課後の学童的な居場所を整える。また、リハビリを必要とする高齢者にとっては、農作業が身体機能の回復を促す場としても活用でき、シルバー人材世代には生きがいと収入の得られる就労の場となる。そして、国内観光客には「農」に触れながら心身を整える体験の場を、インターン生には現地での農業体験を通じた学びを提供するほか、箱根物産連合会と連携することで、地域工芸品の販売にも寄与する。また、外国人観光客に対しては、箱根町国際交流協会の協力を得て通訳サポートを行い、円滑な交流を支援する。ととのえファームはこのようにして、農・癒・育の結節点として、箱根町の持続可能な未来を支える中核的な存在となることを志向する。

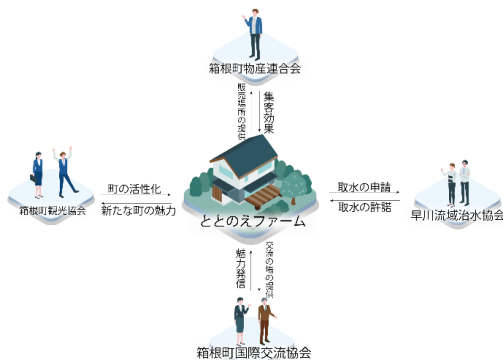


Figure.2 The Relationship Between Totonoe Farm and the Local Government

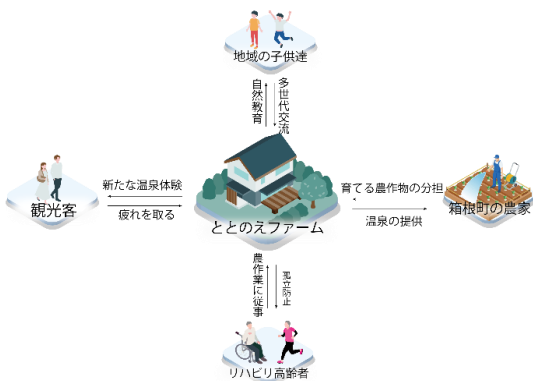


Figure.3 The Relationship Between Totonoe Farm and General Users

3. 配置計画

本設計は、トリアージ的動線を意識して配置計画を考え、「施設を訪れる→診断を受け、自分の体調に合っ

た行動パターンを確認する→農園または温泉に行く→ホテルで宿泊または帰る」という流れの構築を目指す。このトリアージ構想を実現するために、入り口から順に「エントランス→診断エリア→温泉または農園」という配置計画とした。また、診断エリアと温泉・農園の間には早川からの水を引き込み、農業用水や温泉の湯として活用すると共に、水辺の景観を活かして利用者に癒しの効果を与えるデザインとする。

そして、ホテルの客室を2階以上に配置し、1階部分の喧騒から離れた静かな空間を提案する。また温泉と客室の間には、湯気が広がるウッドデッキを設け、プライバシーを守りつつ、温泉とのつながりを感じられる空間を作る。

4. 構造計画

施設の構造計画において、木質構造を採用し、地元の木を利用することで地産地消を促す。また、早川沿いの谷底平野では、場所により軟弱地盤の可能性あり、本計画地は降水量が多いため、杭基礎を採用する。以下に、地場産材を利用した木質構造を採用することで自然の循環をつくる仕組みを表したものを Fig.4 に示す。

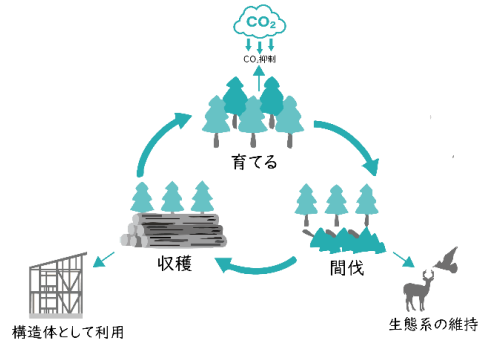


Figure.4 Cycle Diagram of Trees

まず初めに、現在生えている木々を収穫し、本設計物の構造体や意匠的な装飾として利用する。収穫後は木を植えて間伐を行いながら育てる。間伐を行い、木々の数のバランスを取ることで、現在も生息している生物などの生態系の維持につなげる。

5. 参考文献

[1] 箱根町マスタープラン

https://www.town.hakone.kanagawa.jp/www/contents/110000000916/simple/hakone_3rd_master_1703_web.pdf

7.23 参照